

「運動が始まった」



1955年12月1日にローザ・パークスが逮捕されたことから始まったアラバマ州モントゴメリーのバス・ボイコットの成功は、公民権運動を大規模な政治運動に変身させた。このボイコットは、アフリカ系米国人が団結して統制の取れた政治活動に参加できることを実証し、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアの台頭のきっかけとなった。多くの人々を鼓舞し、非暴力的抵抗という高い道徳的基準を維持させ、あらゆる人種・信条・肌の色の米国民をつなぐ橋を築いた指導者キングの存在抜きに、公民権運動を語ることはできない。1960年代の公民権革命には大勢の勇敢な活動家が貢献したが、米国の多くの白人にジム・クロウ制度の現実を直視させ、画期的な1964年公民権法および1965年投票権法の制定につながる政治状況の形成に誰よりも貢献したのは、キングであった。

「譲ることに疲れた」 モントゴメリーのバス・ボイコット

ローザ・パークスは、自分の人生を変えたその日について後にこう語っている。「わたしが疲れていたのは、譲ることに疲れていただけです」南部の黒人が学校を卒業することが困難だった時代に、パークスは中等学校を卒業し、地元の全米有色人種地位向上協会 (NAACP) で活動し、有権者登録をし（これも南部の黒人としては珍しかった）、アラバマ州モントゴメリーで人々の尊敬を集める存在だった。1955年夏には、労働運動



上 アラバマ州モントゴメリーのバス・ボイコット戦略を説明するキング師。キングのアドバイザーたちと座っているローザ・パークス（前列左から2番目）

左 バスの座席を譲ることを拒否したローザ・パークスは、逮捕され、調書を取られ、留置された。逮捕時の写真は、半世紀近くも後、保安官事務所の大掃除中に発見されたものの

の組織者や人種差別廃止支持者の教育訓練機関であるテネシー州のハイランダー・フォーク・スクールで開催された異人種間リーダーシップ会議に出席した。このようにパークスは、アフリカ系米国人の現状を改善しようとする活動について知識があり、自分もその機会が到来すればテストケースの役割を果たすことができると自覚していた。

1955年12月1日、パークスは、地元のデパートの裁縫師として働いていた。その日の午後、仕事を終えて帰りのバスに乗った彼女は、「白人用」座席と「黒人用」座席の間にある「有色人種用」座席の最前列に座った。白人用の座席が満席になり、新たに白人の乗客が乗って来たとき、運転手はパークスに席を譲るよう命じたが、パークスは拒否した。彼女は逮捕され、留置され、最終的には罰金10ドルと裁判費用4ドルの支払いを

命じられた。こうして、当時42歳だったパークスは、政治的
直接行動の世界に足を踏み入れた。

パークスの逮捕に激怒した黒人社会は、市バスのボイコット
運動を組織するためにモントゴメリー改善協会(MIA)を結成。
その指導を、最近モントゴメリーに移ってきたばかりのマー
ティン・ルーサー・キング・ジュニアに求めた。これは、ひと
つには地元社会の指導者間の競争を避けるためであった。デク
スター・アベニュー・バプテスト教会の牧師に就任したばかり
のキングは、当時わずか26歳ながら、指導者の血を引いていた。
父親のマーティン・ルーサー・キング・シニア師は、ジョージ
ア州アトランタの強い影響力を持つエベネザー・バプテスト教
会の牧師で、NAACP ジョージア支部で活動し、1920年代以来、
人種隔離されたアトランタの市バスに乗ることを拒否していた。

キング・ジュニアは、MIAで行った初めてのスピーチで次
のように語った。

わたしたちには抗議をする以外に選択肢はない。わたしたち
は、長い年月にわたり、驚異的な忍耐力を示してきた。そし
て時には、わたしたちの白人の兄弟たちに、このように扱わ
れることに満足しているのだという印象を与えてきた。しか
し今晚、わたしたちは、自由でないもの、正義でないもの
に対する忍耐力から解放されるためにここに集まっている。

キングのリーダーシップの下で、ボイコット参加者は自動車
の相乗りを組織し、黒人のタクシー運転手たちはバス料金と同
じ10セントの乗車料金でボイコット参加者を乗せた。市バス
を拒否して自動車、馬車、そして徒歩という手段を使うという
直接的かつ非暴力的な政治活動によって、市の人種隔離制度に
対して大きな経済的代償を払わせたのである。

この運動はまた、キングの名を全国に広めた。その強力な存
在感と比類のない弁舌は、運動にマスコミの関心を集めると
ともに、特に北部の白人を中心とする同情的な白人層からも支持
を得た。後にタイム誌は、キングは「無名の存在から、一躍こ
の国の傑出した指導者の一人となった」と評した。

キングは自宅を襲撃され、100人以上のボイコット参加者と
共に「バス妨害」を理由に逮捕されもしたが、それでも毅然と
して、非暴力的な戦術を維持し、ボイコット運動に対する尊敬
を集める。一方、モントゴメリーの人種差別主義者に対する信
頼を失墜させた。キングの家で、妻とまだ赤ん坊だった娘の在
宅中に爆弾が爆発する事件が起きたとき、一時は暴動が発生す
るかに見えたが、キングは次のように群衆をなだめた。

わたしたちは敵を愛さなければならない。彼らに好意をも
って接しなければならない。わたしたちはこれを日々の指針と
し、憎悪に対して愛情をもって接しなければならない。わた
したちは、白人の兄弟たちに何をされようとも、彼らを愛さ
なければならない。

モントゴメリーの白人警察官の一人は、後にジャーナリスト

にこう語った。「正直に言って、わたしは恐怖におびえていま
した。あの(中略)牧師が、わたしの命を、そしてそこにいた
すべての白人の命を助けてくれたのです」

最終的には、モントゴメリーのバスの人種隔離制を廃止する
には、ローザ・パークス個人の意志と勇気、そしてキングの政
治的指導力だけではなく、NAACP方式の法廷闘争が必要であ
った。ボイコット参加者が人種差別主義者の抵抗に勇敢に立ち
向かう一方で、人種隔離廃止を支持する弁護士たちは、モント
ゴメリーのバス条例の合理性を問う訴訟を起こし、「ブラウン
対教育委員会」の判例を使って闘っていた。1956年11月、連
邦最高裁はモントゴメリーの上告を退け、モントゴメリーバス
の人種隔離制が廃止された。これによって勢いを付けた公民権
運動は、さらに新たな闘いへと前進していった。

座り込み運動

モントゴメリー・バス・ボイコット運動の成功後間もなく、
マーティン・ルーサー・キングをはじめとするこの運動の指
導者たち——ラルフ・アバナシー師、T・J・ジェミソン師、
ジョセフ・ローリー師、フレッド・シャトルスワース師、C・K・
スティール師、活動家のエラ・ベーカーおよびベイヤード・ラ
スティン——が、南部キリスト教指導者会議(SCLC)を設立した。
この新しい公民権支援組織は、主として法律的なアプローチを
取るNAACPより積極的な取り組み方を採用。有権者登録を推
進する「市民権のための改革運動」を開始した。

一方若い活動家たちは、キングの漸進主義的な戦術にしびれを
切らし始めていた。1960年に、ハーワード大学の学生ストーク
リー・カーマイケルをはじめとする活動家200人が、学生非暴力
調整委員会(SNCC)を設立した。またノースカロライナ州グ
リーンズボロでは、黒人大学ノースカロライナ農工大学の1年生
4人が独自の行動を始めた。

1960年2月1日午後4時半、同大学の学生、エゼル・ブレア・
ジュニア(現在はジブリール・カザン)、フランクリン・ユ
ージーン・マッケイン、ジョセフ・アルフレッド・マクニール、
およびデービッド・リーネイルの4人は、地元のウールワース・



1961年のアラバマ州モントゴメリーにおける公民権活動家による座り込み。
人種隔離されたランチカウンターに静かに座っているだけでも、逮捕される恐
れがあり、場合によってはさらに深刻な事態になることもあった。



労働運動の指導者 A・フィリップ・ランドルフ (右) は、寝台車ポーター組合を結成してその指導者となった。この組合は、多くのアフリカ系米国人に、当時彼らにとってはまれであった中流階級の職業への道を開いた。1941年にランドルフがワシントン大行進を実施すると警告したため、フランクリン・D・ルーズベルト大統領は防衛産業における人種差別を禁止せざるを得なかった。この行進は、有名な 1963 年のワシントン大行進のモデルとなった。

デパートのランチカウンターで白人専用の席に座った。彼らはサービスを拒否されたが、そのまま 1 時間後の閉店時刻まで静かに座り続けた。翌朝には、20 人の黒人学生が、3～4 人ずつのグループに分かれてランチカウンターの座席に座った。地元のグリーンズボロ・レコード紙によると、「騒動はなかった。またグループの中で会話する以外には、話をする者もいなかったようだ。本を取り出して勉強しているらしい学生たちもいた」

ブレアは同紙に、ニグロの大人たちは「おびえて現状に甘んじています。(中略) 誰かが目をさまして現状を変える時が来ており、(中略) わたしたちはここから始めることにしたのです」と語った。

公共の場所を非暴力的に占領する「シットイン (座り込み)」は、少なくとも、インドを英国から独立させるためのマハトマ・ガンジーの運動にまでさかのぼる。米国では、労働団体や北部に本部のある人種平等会議 (CORE) が、すでに座り込み戦術を使っていた。グリーンズボロでの出来事が注目を集め始めるに従い、SNCC は素早くこの公民権運動の戦術を支持し、座り込みは 2 カ月間で 50 を超える都市へ広がった。

中でも重要だったのはテネシー州ナッシュビルでの一連の座り込みで、この町では、キングとつながりのあるナッシュビル・キリスト教指導者会議がこうした機会に向けて準備を進めていた。キングは 1955 年に公民権運動家で宣教師のジェームズ・ローソン師に連絡を取り、「南部にはあなたのような人が誰もいない。すぐに来てほしい」と南部に移って来るよう説得した。ローソンはインドで布教活動に携わり、ガンジーのサティアグラハ (非暴力不服従運動) を学んだ経歴があった。

ローソンは 1958 年に、キングの南部キリスト教指導者会議

(SCLC) と協力して、新しい世代の非暴力活動家の訓練を始めた。その指導を受けた人々には、ダイアン・ナッシュ、ジェームズ・ベベル、そして現ジョージア州選出連邦下院議員のジョン・ルイスなどがある。彼らは間もなく公民権運動家として知られるようになる。こうした訓練セミナーで、デパート内のレストランで一連の座り込みを実行することが決められた。黒人は、デパートで買い物をすることは許されていたが、デパート内のレストランで飲食をすることはできなかった。

ナッシュビルの活動家たちは入念な計画を立て、慎重に動いた。しかし、グリーンズボロの座り込みが全国的に注目され始めたころには、ナッシュビルでも行動を起こす準備が整っていた。1960 年 2 月、ナッシュビルで何百人もの活動家が座り込みを始めた。学生たちが作成した手引書は、次のような、個人としての厳しい規律と、世界に向けて堂々と非暴力を貫く姿勢を表したものであった。

ののしられても、反撃したり暴言を返したりしてはならない。(中略) 店の入り口や通路をふさいではならない。

常に友好的で礼儀正しい態度を取らなければならない。

背筋を伸ばし、常にカウンターに向かって座らなければならない。(後略)

イエス・キリスト、モハンダス・K・ガンジー、そしてマーティン・ルーサー・キングの教えを忘れてはならない。

愛と非暴力を忘れてはならない。あなたがたの一人一人に神の恵みがありますように。

当初、ランチカウンターは、座り込みが始まると閉店していたが、何度か座り込みが続いた後は、警察が座り込んでいる抗議者を逮捕するようになり、その裁判には大勢の聴衆が詰めかけた。風紀びん乱行為で有罪となった活動家たちは、罰金を払わずに禁固刑を受けることを選んだ。

ナッシュビルでの出来事は、実情を暴露されたジム・クロウが存続できないことを示した初期の例であった。伝説的なジャーナリスト、デービッド・ハルバースタムは、当時駆け出しの記者としてナッシュビル・テネシーアン紙にこの運動の記事を書き、全国のマスコミの注意を引くことに一役買った。座り込み運動は全米各地に広がり、間もなく全国の国民が、1960 年 2 月 28 日付のニューヨーク・タイムズ紙に掲載された写真に代表される数々のイメージに衝撃を受けた。この写真の見出しには、「モントゴメリーでニグロ女性に向かって長さ 18 インチ (46 センチ) のバットで殴りかかる白人男性。女性は殴られて負傷した。この女性は昨日、別の白人男性に体が当たったことから、この襲撃を受けた。警察官が近くにいたが、誰も逮捕されなかった」とあった。

その年の 4 月 19 日に、ナッシュビルの学生活動家たちの主任弁護士の自宅で爆弾が爆発した。直ちに、およそ 2000 人の

アフリカ系米国人が市役所へデモ行進を始め、そこで市長と対決した。ダイアン・ナッシュは市長に、ランチカウンターの人種隔離廃止を支持するかと聞いた。市長は、支持すると答えたが、「わたしは人の商売に指図をすることはできない。彼にも権利があるからだ」と言った。

こうした差別をする「権利」が闘争の焦点であった。一方で、ナッシュビルの商人たちは悪評の影響に悩まされ、堂々とした態度で非暴力を貫く黒人学生たちと、彼らに対抗するあまりにも暴力的な武装集団との著しい対比も、こうした悪評に輪をかけた。裏で交渉が行われ、1960年5月10日、ダウンタウンのいくつかのランチカウンターが黙って黒人客を受け入れ始めた。その後は衝突もなく、間もなくナッシュビルは、南部で初めて公共施設の人種隔離を廃止し始めて成功した都市となった。

フリーダム・ライド

ナッシュビルの座り込み運動の若い指導者の一部は、学生非暴力調整委員会(SNCC)と手を組んだ。SNCCは1961年に開始された「フリーダム・ライド」運動を支援した。サーグッド・マーシャルの率いるNAACP弁護士チームが州間バス路線における人種隔離を禁止する最高裁の判決を勝ち取ったのは、1946年のことである。(米国の連邦制度の下では、連邦政府にとって、州の境界を越えて行われる通商を規制することの方が容易であった。)また1960年の「ポイントン対バージニア州」事件では、人種隔離禁止をバスターミナルおよび州間の移動に関連するその他の施設にも拡大するという最高裁判決も下されていた。しかし、権利を持つことと、その権利を行使することの間には、大きな違いがあった。

州間を走るバスの前部座席に座ったり、南部のバスターミナルで、それまで白人専用だった施設を使用したりという憲法上保障された権利を行使するアフリカ系米国人には暴力的な対応が待っていることは、広く暗黙の了解となっていた。こうした了解の下で、COREの全国議長ジェームズ・ファーマーら13人の黒人と白人から成るグループが、ワシントンDCをバスで

出発した。数カ所で降車しながらニューオーリンズまで向かう計画であった。「わたしたちは、途中で逮捕されたら、それを受け入れます。また途中で暴力を受けたら、暴力をもって対応することなく、それを受け入れます」とファーマーは語った。

暴力に関するファーマーの予感正しかった。中でも最も激しかったのが、アラバマ州アニストン付近で起きた暴力事件であろう。アトランタを出発したフリーダム・ライダーたちは2つのグループに分かれ、1つはグレーハウンド社のバス、もう1つはトレールウェーズ社のバスに乗っていた。グレーハウンド・バスでアニストンに到着したグループは、歩道が群衆で埋まっているのを見た。これは見慣れない光景であったが、大勢の人々が集まっていた理由は間もなく明らかになった。バスがバスターションの駐車場に入ると、暴徒の群衆がバスを襲撃し、石やプラスチックでバスの窓を割った。ライダーをひそかに見張るために乗車していた白人のハイウェー・パトロール隊員2人が、バスのドアを閉め切り、クー・クラックス・クラン(KKK)の率いる暴徒の乗車を防いだ。

しばらくして地元警察官らがようやく到着したが、彼らは群衆と冗談を言い合い、誰も逮捕せず、バスを市の外れまで護送した。そのころには200人以上に増えていたとされる暴徒たちは、車やピックアップ・トラックで、バスのすぐ後を付いていた。アニストンを出て10キロメートルほどのところで、タイヤがパンクしバスは停車した。白人男性の群衆がバスに乗ろうとし、その中の一人がバスの窓から火炎弾を投げ入れた。歴史家のレイモンド・アーセノーは、「フリーダム・ライダーの運が尽きたかと思われたとき、燃料タンクが爆発し、暴徒たちはバス全体が爆発することを恐れた」と書いている。バスは炎に包まれ、AP通信の報道によると、バスから逃れたフリーダム・ライダーたちは、「短時間ではあったが、ひどく殴られ、血まみれになった」

フリーダム・ライダーのもうひとつのグループは、トレールウェーズ・バスで、アトランタから乗車したKKK団員のグループと同乗することになった。黒人のフリーダム・ライダーた



上 1961年6月、ワシントンDCからフロリダ州へ向かうフリーダム・ライドのバスに乗り込むメリーランド州プレントウ德的ベリー・A・スミス3世師とニューヨークのロバート・ストーン師

左 ミシシッピ州ジャクソンのバスターミナルに到着するフリーダム・ライダーの乗ったトレールウェーズ・バス



銃剣を構えた州兵に護衛されてアラバマ州モントゴメリーからミシシッピ州ジャクソンへ向かうフリーダム・ライダーたち。州兵の後ろにはさらに20人以上のフリーダム・ライダーがいる。

ちが後部座席に座ることを拒否すると、再び暴力が振るわれた。61歳の教育者ウォルター・バーグマンら白人のライダーは、特に激しい暴力を受けた。しかし、ライダーたちは全員、ガンジーの教えに基づく訓練に従い、誰一人暴力に抵抗しなかった。バスはようやくバーミングハムに到着したが、事態はさらに悪化した。CBSニュースの解説者ハワード・K・スミスは、目撃者として次のように証言している。「バスが到着すると、無法者たちが乗客を捕まえて路地や通路に引きずり込み、パイプや鍵束やこぶしで殴りつけた」人種隔離されたバスステーションの中では、フリーダム・ライダーたちが一瞬ためらった後、白人専用の待合室に入っていった。彼らも殴打され、意識を失う者も出た。その間、バーミングハムの警察署長ユージーン・「ブル」・コナーは、KKK団員やその支持者を制止しようとしなかった。

それでもライダーたちは旅を続ける決意を固めていた。ワシントンでは、ロバート・F・ケネディ司法長官がジョン・パターンソン・アラバマ州知事に、フリーダム・ライダーが同州を無事に通過することを保証するよう要請した。パターンソンは、「州民は怒り狂っており、わたしはこの扇動家たちの保護を保証することはできない」として、これを拒否した。アラバマ州選出の連邦下院議員ジョージ・ハドルストン・ジュニアは、フリーダム・ライダーは「進んで人種的な憎悪を売り込む商人」であり、グレーハウンド・バスのグループが火炎爆弾の襲撃を受けたのは「身から出たさび」だと述べた。

ナッシュビルでは、ダイアン・ナッシュが政治的な影響を懸念していた。彼女は後にこう語っている。「フリーダム・ライドが暴力によって阻止されたなら、この運動の将来はないとわたしは確信していました。なぜならそれは、運動が始まったら圧倒的な暴力で攻撃しさえすれば黒人はおとなしくなる、という印象を与えることになるからです」当初のフリーダム・ライダーに加えて、SNCC およびその他の黒人・白人活動家が参加して、新たな運動が開始された。

5月20日、フリーダム・ライダーの一団がアラバマ州のバ

ーミングハムからモントゴメリーへ向かうグレーハウンド・バスに乗車した。AP通信の報道によると、バスが停車場に到着すると、「間髪を入れず」推定1000人の暴徒が襲い掛かった。負傷者の中には、ケネディ司法長官の補佐官ジョン・シーゲンソーラーがいた。ケネディは、法の執行のためモントゴメリーに連邦保安官400人を派遣した。一方、人種平等会議(CORE)は、フリーダム・ライドを継続し、ミシシッピ州ジャクソンへ、そしてさらにはニューオーリンズへ向かうことを約束した。ジェームズ・ファーマーはニューヨーク・タイムズ紙に、「大勢の学生たちが必要に応じてボランティアとなれるように他の各都市で待機しています」と語った。そして実際におよそ450人の米国民が志願してバスに乗車し、特にジャクソンでは、ファーマーをはじめとする大勢のフリーダム・ライダーが「治安妨害」の罪に科せられる罰金の支払いを拒否し、逮捕されて留置場を満員にした。

5月29日、ケネディ司法長官は、州間通商委員会(ICC)に、州間輸送機関の人種差別を廃止するために厳しい規制を採用するよう命じた。ICCはこれを実行した。こうした連邦政府の措置により、少なくとも州間輸送のバスターミナル、バス、および鉄道では、ジム・クロウの力が弱まった。

フリーダム・ライダーの勝利は、その後の偉大な公民権運動を方向付けた。公民権運動の最盛期においてこれが初めてではなかったが、検閲を受けない自由な報道によって、米国民は非道な人種差別の現実を直視することを強いられた。バーミングハムでは暴徒が地元紙ポスト・ヘラルドのカメラマン、トミー・ラングストンを殴打し、カメラを壊した。しかし彼らはフィルムを抜き取ることを忘れたため、近くにいた黒人を激しく殴る暴徒たちの写真が、同紙の一面に掲載された。逮捕や殴打事件が起こるたびに、より大きくマスコミに注目され報道されるようになった。記事の多くは、依然として「ニグロ過激派」という言葉を使っていたが、怒り狂った白人の暴徒と、落ち着いて威厳のある黒人と白人のフリーダム・ライダーとの対比は見逃しようもなく、米国民は、少なくとも「米国の価値観を最もよく代表しているのはどちらか」ということを考え始めざるを得なかった。

フリーダム・ライダーの勇気と彼らの闘いの正しさを称賛する人々の中には、白人の宗教指導者が大勢いた。ピリー・グラハム師は、フリーダム・ライダーを襲撃した者を起訴するよう求め、「いかなる社会においても特定の人々が2級市民として扱われるのは嘆かわしいこと」であると断じた。ユダヤ教のラビ、バーナード・J・バムバーガー師は、白人の人種差別主義者による暴力を「道徳的にも法律的にも全く弁護の余地のない」ものとして糾弾し、公民権運動活動家に「急がず慎重にやる」ように要求する白人たちを批判した。そして、どんなときにも心の真つすぐな人たちがいた。レイモンド・アーセノーが書いていたところによると、アニストン郊外でグレーハウンド・バスが炎上したとき、「12歳の少女ジェイニー・ミラーは、煙にむせる犠牲者たちに水を飲ませるために、KKK団員の罵声(ばせい)を浴びながらも、5ガロン(19リットル)のバケツで何度も水を汲んで運んだ」

オルバニー運動

1962年と1963年に行われた2つの主要な公民権運動は、非暴力抵抗の限界と可能性を示す事例となった。人種隔離制度が実施されていたジョージア州オルバニー市のアフリカ系米国人は、従来、ジム・クロウの南部で可能な政治活動を精いっぱい行っていた。1961年に、SNCCのボランティアが、オルバニーで行われていた有権者登録運動を強化するために同市にやってきた。彼ら是有権者登録センターを設置し、ここが座り込みやボイコットなどの抗議運動の本拠ともなった。1961年11月、地元の多くの黒人組織が「オルバニー運動」という組織を結成し、若い整骨医ウィリアム・G・アンダーソンがそのリーダーとなった。抗議運動がさらに活発に行われるようになり、12月半ばまでには、500人を超えるデモ参加者が留置された。アンダーソンは、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアとキングの仲間であるラルフ・アバナシー師と面識があった。アバナシーは、モントゴメリーのファースト・バプテスト教会の牧師で、南部キリスト教指導者会議(SCLC)ではキングの首席補佐官を務めた。アンダーソンは、オルバニー運動の勢いを維持するため、そして全国的なマスコミの注目を集めるために、キングの援助を求めた。

オルバニーの警察署長ローリー・プリチェットは、キングや他の活動家にとって手ごわい相手であった。プリチェットは、堂々とした非暴力的な公民権運動活動家たちに対する人種隔離主義者の暴力がマスコミに報道されたことによって、すでに多くの米国民がジム・クロウに反感を持つようになっていたことを十分に理解していた。そこで、オルバニー運動には極力そのような「マスコミの注目を集めるチャンス」を与えないよう努めた。オルバニーの警察官たちは、抗議者に対して、特に近くに報道関係者がいる場合には、いかなる暴力をも振るわないように言い渡された。それまでの抗議者たちは「留置場を満員にする」ことに成功していたが、プリチェットは、逮捕した者を周辺の各郡に分散して留置した。『新ジョージア百科事典』によると、「結局プリチェットの留置場のスペースが足りなくなるより先に、キングの抗議デモ志願者の方が足りなくなった」

またプリチェットは、マスコミにとってはキングがスターであり、キングという「切り口」がなければ全国的な報道は減る、ということも理解していた。キングは数回にわたってオルバニーを訪れ、数回にわたって治安妨害で逮捕され有罪となった。裁判所は、キングとアバナシーに、禁固刑か罰金刑の選択肢を与えたが、2人は確実にマスコミの注意を引くために禁固刑を選んだ。ところが、「匿名の篤志家」(プリチェットの依頼を受けた人種隔離主義者)が罰金を払い、2人は釈放されてしまった。

1962年7月24日に、ようやく「マスコミの注目を集めるチャンス」が訪れたが、それはキングが望んでいたものとは違った。そのころには、オルバニーのアフリカ系米国人の多くは、運動が前進しないことに不満を募らせていた。その日の夕方、黒人2000人の群衆が、れんが、ガラス瓶、石などで武装して、オルバニーの警察官とジョージア州ハイウェー・パトロール隊員の一団を襲撃した。州警察官一人が歯を2本折られたが、警



1962年8月、アラバマ州モントゴメリー市役所前で、さまざまな宗派の聖職者約70人が人種隔離反対の祈禱(きとう)集会を開いた後に逮捕された。

官たちはローリー・プリチェットの指導をよく守り、反撃しなかった。プリチェットは主導権を握る機会を逃さず、「あの非暴力的な石つぶてを見たかね」と言った。

キングは、ダメージを抑えるため、直ちに行動した。彼は、予定されていた大規模なデモを中止し、その日を償いの日とすることを宣言した。しかし、連邦政府が、オルバニーにおけるデモの実施を禁止する命令を出したため、状況はさらに困難になった。それまでは法律が公民権支持派の味方であったが、この禁止命令により、キングら活動家が何らかの行動を取れば、人種隔離支持派はキングらが法律に違反していると主張することができた。

キングは、もはやオルバニーにいても運動全体のためにならないと判断した。SNCC、NAACP、CORE、およびその他の地元の活動家たちは、その後もオルバニーで闘いを続け、最終的には同市のアフリカ系米国人のために真の前進をもたらした。キングとSCLCチームにとって、オルバニーは教訓となった。キングは、自伝で次のように述べている。

その何カ月か後にバーミングハムでの戦略を立てたとき、われわれは何時間もかけてオルバニーでの状況を分析し、その間違いから教訓を得ようとした。その結果として、その後の戦術の効果を高めることができただけでなく、オルバニー自体も全くの失敗ではなかったことが明らかになった。

バーミングハムでの逮捕

オルバニーの警察署長ローリー・プリチェットは、非暴力に非暴力で対抗するだけの政治的手腕と冷静さを備えていたが、アラバマ州バーミングハムの警察署長ブル・コナーは、そうではなかった。キングをはじめとする公民権運動の指導者たちは、

コナーを絶好の引き立て役と考えたが、その予測は正しかった。キングの伝記の著者マーシャル・フレイディは、コナーについて、「臆面もなく脅しをかける、旧来のあからさまな人種差別主義者だった。中折れのストローハットをかぶり、肩をそびやかして歩く、ずんぐりした中年のボスで（中略）その怒りっぽい短気な性格は有名だった」と書いている。コナーは、バーミングハムのすべての白人の考え方を代表していたわけではなく、少し前に行われた地方選挙では、改革派の候補たちが得票を伸ばしていた。しかし、コナーは警察を支配する立場にあり、1961年にフリーダム・ライダーがバーミングハムで受けた「出迎え」は、ここで活動家が受けるであろう待遇を十分に予想させるものであった。

オルバニーでの体験から、キングと SCLC のチームは、人種隔離廃止という全体的な目標より、もっと具体的な目標に重点を置くべきであるとの教訓を得ていた。キングは後に次のように書いている。

われわれは、強硬派の地域社会においては、不正で複雑な人種隔離制度のひとつの側面に焦点を絞って闘う方が効果的であるという結論に達した。そこで、バーミングハムでの闘争は、ビジネス社会に的を絞ることにした。当地の黒人の住民が十分な購買力を持ち、多くの事業の利益を左右する力を備えていることが分かっていたからである。

1963年4月3日、活動家たちは一連のランチカウンター座り込み運動を開始した。続いて4月6日にはバーミングハム市役所前でデモ行進が行われた。同市のアフリカ系米国人はダウンタウンの店のボイコットを開始し、キングはこの戦術を「驚くほど効果がある」と評した。多くの店はすぐに「白人専用」の看板を外したが、このような店に対してブル・コナーは、営業許可を取り消すと脅した。抗議運動の志願者が増えるに従い、バーミングハムの運動は、地元の教会での「ニールイン（ひざまずき）」運動や図書館での座り込み運動へと拡大していった。逮捕者の数も増え、留置場が満員になった。

その時点では、警察の対応はまだ控えめであった。典型的な出来事がニューヨーク・タイムズ紙に次のように報道されている。



ジョージア州オルバニー 同市で逮捕されたフリーダム・ライダーたちの審問が行われている間に、ひざまずいて祈るアフリカ系米国人のデモ参加者（1961年12月）

8人のニグロが、人種隔離された図書館に入った。彼らは、4つの階のうち3つを歩き、机に向かって雑誌や本を読んだ。警官がいたが、彼らに退去を命じることはなかった。約30分後、彼らは自主的に図書館を去った。

ニグロたちが入ってきたとき図書館にはおよそ25人の白人がいた。中には、「臭いな」などと軽蔑的なことを言ったり、ニグロたちに向かって「家へ帰れ」と言ったりする者もいたが、特に問題は起きなかった。

4月10日に、コナーはプリチェットの例に従い、キング、フレッド・シャトルスワース、その他134人のリーダーたちがボイコット、座り込み、ピケなどの抗議活動を行うことを禁止する郡の裁判所命令を入手した。この禁止命令に違反すれば法廷侮辱罪となり、その刑罰は単なる治安妨害の場合より重い禁固刑であった。

キングは選択を迫られた。そしてアバナシーとともに、自らこの禁止令に違反する決断を下し、次のような短い声明を発表した。

この禁止命令は、法的手続きを不正かつ非民主的に、そして憲法に違反して悪用したものである。われわれは良心に照らし、そのような禁止命令に従うことはできない。

われわれがこの禁止命令に従わないのは、法律を軽視するからではなく、法律に対して最大の敬意を払うからである。これは、法の目をくぐったり、あるいは法律を無視したり、混乱した無秩序を引き起こすためではない。われわれは、良心に照らして不公正な法律に従うことができないと同様、法廷を不正に利用する行為にも敬意を払うことはできない。

われわれは、正義と道徳性を基づく法制度を信じている。われわれは、合衆国憲法を深く愛し、アラバマ州の司法制度を浄化することを望むが故に、この行動がもたらし得る結果を認識した上で、この重大な行動を取る危険を冒すのである。

1963年4月12日の聖金曜日に、マーティン・ルーサー・キングは、バーミングハムのダウンタウンに向かう抗議デモの先頭に立った。行進が5ブロック目に差しかかったところで、キング、アバナシー、および抗議に加わった白人牧師一人を含む約60人が逮捕された。キングが拘置されたとき、コナーは「彼は逮捕されるためにここに来ただろう。これで願いがかなったというものだ」と言った。

バーミングハムの獄中からの手紙

キングは、独房で孤独な日々を送る中で、米国思想史においても有数の優れた文章を書き著した。地元の数人の白人牧師たちは、キングの長期的な目標には賛成していたが、短期的な戦術には反対しており、キングの率いる抗議デモは「思慮に欠けた時期尚早な」行為であるとする公式声明を発表して、キングの市民的不服従にも、「それらの活動が理論的にはいかに平和

的な行動であろうとも」反対した。

キングは、これに対する返答として「バーミングハムの獄中からの手紙」を書いた。それは、便せんが手に入らないため、新聞紙の余白に走り書きされたものであった。その新聞紙を獄中からひそかに運び出したキングの側近は、害虫駆除の広告や園芸クラブのニュースの周りにキングの手書きの言葉が書かれていた、と回想している。しかし、その余白に書かれた言葉は、不正を目の前にして何もしないことを強く非難するとともに、自由を求める運動が米国で必ず勝利を収めるという極めて強固な信念を表していた。

キングは、白人牧師たちの批判に対して、時代を超えた普遍的な真実をもって応えた。外部からバーミングハムにやってきて緊張関係を煽ったという非難に対して、キングは、抑圧の下では外部の者など存在しない、と答えた。「どこかで不正があれば、あらゆる場所の正義にとって脅威となります。わたしたちは逃れることのできない相互関係の網に捕らわれているのであり、ひとつの運命の衣に包まれています。一人に影響を及ぼすことは、間接的に全員に影響を及ぼすこととなります」また緊張関係については、「成長のために必要な、建設的かつ非暴力的な緊張関係があります」と書いた。そして、人種隔離という病に苦しんでいない人々にとっては、いかなる直接行動も時宜を得たものではないとし、『「待て」という言葉は、ほとんどの場合『絶対にだめだ』ということの意味してきました』と述べた。さらにキングは、「他の人間の自由のスケジュールを設定する」ことは誰にもできないと主張した。

キングは、支持者らと共に郡裁判所の禁止命令に違反したことを認めたが、公正な法と不公正な法を区別する聖アウグスティヌスの言葉を引用し、地域社会の意識を高めるために不公正な法律を破る者は、その行動が「率直な、愛に満ちたものであり、懲罰を受ける意志の伴うもの」であるならば、「実際には法に対する最大の敬意を表している」、と主張した。獄中でこれをしたためたキングは、自ら模範を示したことになる。

獄中のキングは、米国において最終的には自由が勝利を収めること、そして勝利を取めなければならないことを確信していた。「わたしは、この闘争の結果について何も心配していません。(中略) わたしたちは自由という目標を達成するでしょう。(中略) 自由は米国の目標であるからです。(中略) わたしたちの運命は米国の運命に結び付いています。(中略) 高くこだまするわたしたちの要求には、わが国の神聖な伝統と神の永遠の意志が体現されています」そしてキングは、「いつの日か南部はその真の英雄たちを正しく評価するでしょう」と述べた。

「運動が始まった」

バーミングハムでの運動には彼らの指導力が必要だったため、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアとラルフ・アバナシーは、留置場で8日間過ごした後、保釈金を払って釈放された。彼らは、ジェームズ・ベベル師が考案した戦術を採用した。ベベルは、ナッシュビルの座り込み運動やフリーダム・ライド

の闘士で、キングに誘われて南部キリスト教指導者会議(SCLC)の直接行動・非暴力教育を担当する責任者を務めていた。ベベルは、ほとんどの黒人家庭では一家の大黒柱が留置されれば生活に困ることから、市内の若いアフリカ系米国人を組織し始めた。大学生、中学・高校生、そして小学生までが、非暴力の原則を教えられた。彼らは、ダウンタウンへ行進し、そこで白人専用のランチカウンターに座り、白人専用の水飲み場を使い、白人専用の図書館で勉強し、白人専用の教会で祈りを捧げる準備をした。少なくとも一部の宗派の白人教会は、若い黒人たちを歓迎した。

子どもたちを運動に使う決断は論議を呼んだ。SCLCの理事会役員だったワイアット・ティー・ウォーカー師は、「ニグロの子どもたちは、人種隔離された学校に5カ月間通うよりも、留置場で5日間過ごした方が、多くを学ぶことができる」と述べて、この決断を擁護した。キングは、『自伝』の中で、父親の反対を押し切って行進に参加した10代の黒人少年の話を紹介している。

少年は言った。「お父さん、僕はお父さんに逆らいたくはないけれど、もう誓ったのです。家から出るなどと言われても、僕はこっそり出掛けます。そのために僕を罰する必要があると思うなら、僕は罰を受けます。これは、僕の自由のためだけではなく、お父さんとお母さんの自由のための行動です。お父さんが死ぬ前に実現させたいのです」

父親は考え直して、息子の参加を認めた。

1963年5月2日、何百人もの若いアフリカ系米国人が行進を始めた。彼らはトランシーバーで連絡を取り合い、「We Shall Overcome」を歌いながら歩いた。数百人が逮捕され、バーミングハムの留置場は超満員となった。そして、おそらくそれ以上に重要なのは、彼らがブル・コナー署長の苛立ちを極限にまで追い込んだことである。

5月3日に、コナーは力づくで行進をやめさせる決断を下した。水圧を最大にした消防用ホースがデモ参加者に向けられ、彼らは、木の皮をはぐほどの強力な水流に打たれて倒れ、アスファルトの道を転がった。署長命令で、群衆を解散させるために警察犬が使われ、数人のデモ参加者がかまれた。

学生非暴力調整委員会(SNCC)の活動家ジェームズ・フォアマンは、SCLCの本部でそのニュースを聞いた。彼によると、本部にいた指導者たちは「飛び跳ねて大喜びした。(中略) 彼らは『これで運動が始まった。警察に暴力を使わせたぞ』と何度も何度も繰り返した」フォアマンはこれを「ひどく冷酷で残酷で打算的」だと思ったが、後に歴史家のC・バン・ウッドワードが述べたように、「より経験豊富な活動家たちは、良くも悪くも報道写真が大きな力を持つことを学んでいた」のであった。

その週、若者たちは毎日ダウンタウンでデモ行進を行い、毎回、消防用ホースと警察犬が使用された。その結果、そうした光景をとらえた写真や映像や記事が、米国および世界各地の

ニュースで大きく取り上げられた。こうした最大の挑発に対しても、ほとんどのデモ参加者は非暴力を貫いた。ジェームズ・ベベルは、メガホンで「非暴力デモができない人は帰ってください」と叫びながら、通りを歩いていった。5月6日までは、ブル・コナーは何千人もの子どもたちを逮捕し、州の催事場に収容していた。

ニューヨーク・タイムズ紙の社説は次のように述べ、増加する一方だったこうした心情を抱く米国民を代弁した。

人間の尊厳を尊重することを学んだ米国民ならば、ニグロと白人のデモ参加者に対するアラバマ警察当局の野蛮な行為の記事を読んで、恥じ入らずにはいられないだろう。バーミングハムで学童たちを服従させるために警察犬や高圧ホースが使われたことは、国家の恥である。何百人ものティーンエージャーや、ティーンにもならない子どもたちが、自由という生得権を要求したために留置場や少年院に入れられていることは、法的な手続きを愚弄（ぐろう）するものである。

ワシントンDCでは、ある重要人物がこれを読んで、同様の意見を表明した。その様子を、キングの伝記作家マーシャル・フレイディは次のように述べている。

警察官が黒人の若者のシャツの胸を片手でつかみ、もう一方の手に犬の綱を握り、その犬が若者の胴体に向かって飛び掛かろうとしている写真が、オーバル・オフィス（大統領執務室）の大統領の目に触れた。その日、大統領は訪問者の一団に「あれには吐き気を催すよ」と言った。

5月7日に、フレッド・シャトルスワースが、消防ホースの水に打たれ、自分の教会の壁にたたきつけられて負傷した。その数分後、現場に到着したブル・コナーは、「見られなくて残念だった。（中略）霊きゅう車で運ばれてくれればよかったの」と言い放った。

5月9日までは、バーミングハムの店主たちは我慢の限



1963年5月アラバマ州バーミングハム——水圧を最大にした消防用ホースは、木の皮をはぐほどの威力があった。警察署長ブル・コナーは、非暴力的な公民権運動活動家をホースで制圧することを命じ、その映像は全米の人々に衝撃を与えた。

界に達していた。彼らはキングおよびシャトルスワースと交渉し、合意に達した。バーミングハムの商店は、ランチカウンター、トイレ、水飲み場の人種隔離を廃止し、黒人従業員を雇い昇進させることになった。また留置されていたデモ参加者たちは釈放され、告訴は取り下げられることになった。ブル・コナーは、「生涯最悪の日だ」と言った。

バーミングハム運動の勝利は、アフリカ系米国人抗議者たちの勇気と規律によってもたらされた。それは、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア、ラルフ・アバナシー、フレッド・シャトルスワース、ジェームズ・ベベルといった指導者たちの、人々を鼓舞する意思堅固な力の成果でもあった。これによって米国民は、新聞の紙面やテレビの画面で、ジム・クロウの凶暴性の現実を直視することを強いられた。またバーミングハムでの勝利は、奴隷制度と人種隔離制度の時代を生き延びてきた理想主義と、長年にわたって先延ばしにされてきた約束の実現を求める焦燥感を反映したのもでもあった。5月8日に、バーミングハムの少年裁判所の判事が、5月3日の抗議活動で逮捕された15歳の少年の事件を審理した。以下はそのやりとりである。

判事 わたしはよく建国の父たちの言葉を思い起こす。それは「制限のない自由はない」という言葉です。家へ帰って学校に行きなさい。分かりましたか。

少年 ひと言言ってもいいですか。

判事 何でも言ってみなさい。

少年 あなたは自由があるからそう言えるのです。憲法にはわたしたちは皆平等であると書かれているけど、ニグロは平等ではありません。

判事 しかし君たちは大きく前進してきたし、今も前進を続けている。これには時間がかかるのです。

少年 わたしたちは100年以上も待ち続けているのです。

ワシントン大行進

バーミングハム運動は真の勝利を取めたが、その代償は大きかった。アフリカ系米国人が人種隔離制を打ち負かすためには、1回に1都市ずつとか、殴られ、犬にかまれ、消防用ホースの攻撃を受ける、といったやり方は長期的な解決策とはなり得なかった。公民権運動は実質的な前進を見せていたが、その一歩ごとに執拗な反対に出会った。1962年には、ミシSSIPPI大学初の黒人学生ジェームズ・メレディスが無事に入学できるようにするため、連邦軍が派遣されなければならなかった。その翌年には、知事就任演説で「今ここで人種隔離を、明日も人種隔離を、永遠に人種隔離を」と約束していたアラバマ州のジョージ・ウォレス知事が、「学校の講堂の扉の前に立ちはだかる」という行動に出た。そのため、アフリカ系米国人学生ビビアン・マローンとジェームズ・フッドがアラバマ大学に入学するには、連邦保安官の介入が必要であった。その翌日、ミシSSIPPI州ジャ

クソンで、同州の NAACP の指導者メドガー・エバーズが自宅前で殺害された。またバーミングハム自体においても、1963年9月15日、3人のKKK団員が、バーミングハム運動の非公式な本部であった16番通りバプテスト教会の地下室にダイナマイト19本を仕掛けた。アディー・メイ・コリンズ、キャロル・ロバートソン、シンシア・ウェズリー、デニズ・マクネアという4人の少女が死亡し、22人が負傷した。

1963年6月11日、ジョン・F・ケネディ大統領は、ホテル、レストラン、劇場、商店などあらゆる私有の施設における人種隔離を禁止する法案を連邦議会に提出することを、全国民に向けて発表した。大統領は、「わたしたちが直面しているのは、主として道徳上の課題である。それは、聖書の時代にさかのぼるほど古い課題であり、合衆国憲法に明確に述べられている課題である」と述べた。しかし、効果のある公民権法の可決を阻む障害は依然として大きかった。

何人かの黒人指導者は、連邦議会が公民権法を検討する政治的現状を変えようと決心した。その一人がA・フィリップ・ランドルフである。当時すでに70歳を超えて久しかったランドルフは、かつて寝台車ポーター組合を結成し、何十年にもわたってその指導者を務めていた。長年、寝台車のポーターにはアフリカ系米国人が従事することが多かった。これは全米各地で、黒人が働くことのできる最も良好な職場のひとつであり、こうしたポーター組合の指導者として、ランドルフは米国の労働運動における重要な存在となっていた。

1941年に、フランクリン・D・ルーズベルト大統領は、米国の第2次世界大戦参戦の可能性を踏まえて、国防生産の強化を目指していた。ランドルフはルーズベルトに対し、連邦政府機関および防衛産業における人種隔離廃止の要求を突きつけた。ランドルフは、この要求が受け入れられなければ、ワシントンDCで大規模なデモ行進を行うと警告した。間もなくルーズベルトは、防衛産業と連邦政府各局における差別の禁止と公正雇用実施委員会(FEPC)の設置を命じる行政命令を發布した。第2次大戦後、ランドルフからの圧力が一因となって、ハリー・S・トルーマン大統領は、1948年に米国の軍隊の人種隔離廃止を命じた。

そして今、ランドルフは、有能な補佐役ベイヤード・ラストンと共に同様の行進を計画し、「ひとつの行動の中に、公民権運動だけでなく全国的な経済面での要求をまとめて組み入れようとした。このイベントを組織するために「ビッグ・シックス」と呼ばれる公民権運動の指導者6人のグループが結成された。そのメンバーは、ランドルフ、キング、ロイ・ウィルキンズ(全米有色人種地位向上協会)、ジェームズ・ファーマー(人種平等会議)、ジョン・ルイス(学生非暴力調整委員会)、およびホイットニー・ヤング・ジュニア(都市同盟)であった。彼らは、行進を1963年8月28日に行うことを決め、その大集会の場所としてワシントンDCのリンカーン記念堂を選んだ。

この「雇用と自由のためのワシントン大行進」は、米国史上最も大規模な政治デモ行進となった。全米各地から参加者が貸

し切りのバスや列車でワシントンに向かった。当日集まった米国民は25万人(それ以上という説もある)、そのうち少なくとも5万人は白人であった。演壇には、公民権運動の英雄として知られる人々、キリスト教およびユダヤ教の宗教指導者、労働組合のリーダー、芸能人らが並んでいた。1939年にワシントンのコンスティテューション・ホールで歌うことを許されず、リンカーン記念堂でコンサートを行った黒人コントラルト歌手マリアン・アンダーソンが米国の国家を歌った。ビッグ・シックスのメンバーがそれぞれ演説をしたが、ファーマーだけは、ルイジアナ州での抗議活動で逮捕されていたため参加できなかった。

この日、最も人々の記憶に残る場面となったのはキングの演説であった。キングの「わたしには夢がある」という演説は、聖書のテーマ、そして合衆国憲法、独立宣言、リンカーンのゲティスバーグ演説など米国の象徴する文章の理念を織り込んだものであり、米国人による演説としては最も優れたものであるとする評価が多い。この演説は、キングがいつも日曜日の朝の礼拝で行ってきた説教の形式とスタイルを採り入れたものであった。

キングはまず、公民権運動を、まだ実現されていない過去の約束に結び付けることから語り始めた。リンカーンの奴隷解放宣言は、自由になった奴隷たちにとっては、「捕らわれの身にあった彼らの長い夜に終止符を打つ、喜びに満ちた夜明け」であると思われた、とキングは語った。しかし、それから100年後、「黒人は、(中略)自分自身の土地にいながら、島流しになっている」米国の建国者たちが独立宣言と合衆国憲法を書き記したとき、「彼らは、あらゆる米国民が継承することになる約束手形に署名したのである。この手形は、すべての人々は、白人と同じく黒人も、『生命、自由、そして幸福の追求』という『不可侵の権利』を保証される、という約束だった」

キングは、米国が、少なくとも有色の米国民に対してはこの約束手形を不渡りにしている、と述べた。

われわれは、正義の銀行が破産しているなどと思いたくない。この国の可能性を納めた大きな金庫が資金不足であるなどと信



ワシントン大行進を企画するためにニューヨークに集まった「ビッグ・シックス」と呼ばれる6人の有力者。左から、ジョン・ルイス、ホイットニー・ヤング、A・フィリップ・ランドルフ、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア、ジェームズ・ファーマー、ロイ・ウィルキンズ

じたくない。だからわれわれは、この小切手を換金するために来ているのである。われわれの要求に応じて、自由という財産と正義という安全を受け取ることができるこの小切手を換金するために、ここにやってきたのだ。

キングは、「黒人に公民権が与えられるまでは、米国には安息も平穏も訪れることはない」と警告したが、同時に次のようにも語った。

正当な居場所を確保する過程で、われわれは不正な行為を犯すことがあってはならない。われわれは、敵意と憎悪の杯から飲むことによって、自由への渇きを癒やそうとしないようにしよう。われわれは、絶えず尊厳と規律の高い次元での闘争を展開していかなければならない。われわれの創造的な抗議を、肉体的暴力へ墮落させてはならない。

キングの演説の「夢」に関する部分は、即興的なものだったという説もある。キングが演説しているときに、有名なゴスペルシンガーのマヘリア・ジャクソンも舞台におり、演説の途中でキングに「マーティン、夢のことをみんなに話さない」と言った。そして彼は夢について語り始めたのである。

(前略) われわれは今日も明日も困難に直面するが、それでもわたしには夢がある。それは、アメリカン・ドリームに深く根ざした夢である。

わたしには夢がある。それは、いつの日か、この国が立ち上がり、「すべての人間は平等に作られているということは、自明の真実であると考える」というこの国の信条を、真の意味で実現させるという夢である。

わたしには夢がある。それは、いつの日か、ジョージア州の赤土の丘で、かつての奴隷の息子たちとかつての奴隷所有者の息子たちが、兄弟として同じテーブルに着くという夢である。

わたしには夢がある。それは、いつの日か、不正と抑圧の炎熱で焼けつかんばかりの砂漠の州、ミシシッピでさえ、自由と正義のオアシスに変身するという夢である。

わたしには夢がある。それは、いつの日か、わたしの4人の幼い子どもたちが、肌の色によってではなく、その人格の中身によって評価される国に住むという夢である。

今日、わたしには夢がある。

その日のワシントンにおける映像や言葉が全米を、そして世界を駆け巡るに従い、真の変革への勢いが加速された。しかし、まだ多くの闘いが必要であり、勝利は、かつてないほど近付いてはいたものの、まだ遠くにあった。

「わたしには夢がある」 1963年、米国史上最大の政治デモ集会で演説をするマーティン・ルーサー・キング。この演説は、米国人による演説としては最も優れたものとする評価が多い。



ローザ・パークス 公民権運動の母

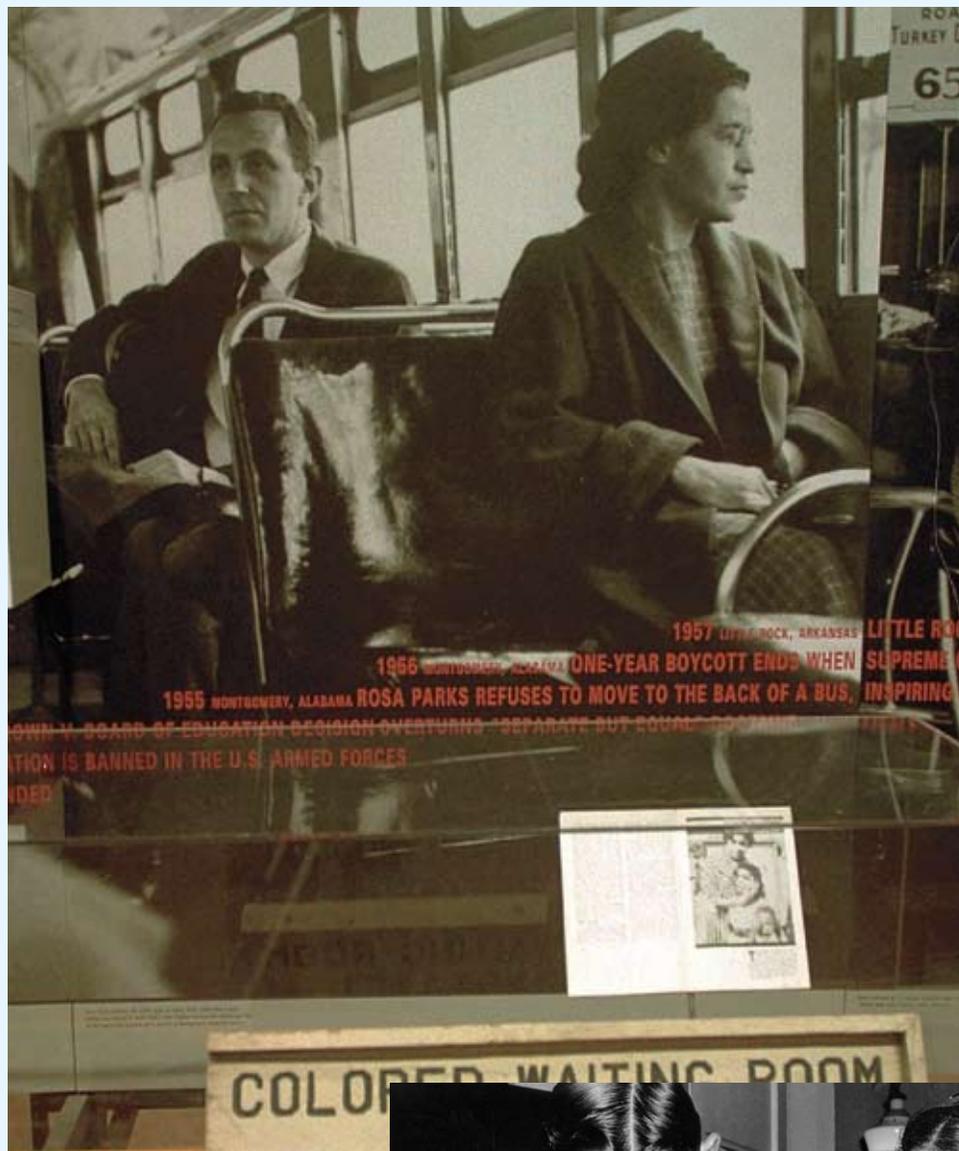
ローザ・マコーリー・パークスは、今日「公民権運動の母」として知られている。彼女がバスの座席を譲ることを拒否したことからアラバマ州モントゴメリーでバス・ボイコット運動が始まり、これが公民権運動の転換点となったからである。裁縫師として働いていたパークスは、1955年12月1日の午後、仕事帰りのバスに乗ったとき、歴史を変えようというつもりはなかった。1日の仕事に疲れ、ただ家へ帰りたいただけであった。しかし、バスの運転手に、前部座席を白人男性に譲って後部座席へ移るように言われたとき、パークスはどうしても譲る気にはなれなかった。

後に彼女は、「逮捕されようと思ってバスに乗ったわけではなく、家に帰ろうとしていただけなのです」と語っている。

その時点でパークスは、自分の行動がきっかけとなって381日間に及ぶバス・ボイコットが始まるとは思っていなかったが、ひとつだけ確信していることがあった。彼女自身のバス・ボイコットがその日に始まった。

「わたしはそのとき、人種隔離されたバスには2度と乗るまい、と決心しました」

黒人社会で広く尊敬されていた女性ローザ・パークスの逮捕と短期間の拘置、そしてそれによって発生したバス・ボイコット運動は、市バス



上 市バスの人種隔離を違憲とする連邦最高裁判所の判決が下された後、アラバマ州モントゴメリーのバスの前部座席に座るローザ・パークス。1955年12月にパークスが前部座席を白人男性に譲ることを拒否したことから、モントゴメリー・バス・ボイコット運動が始まり、これによってマーティン・ルーサー・キング・ジュニアが公民権活動家として一躍有名になった。

右 逮捕され指紋を取られるローザ・パークス



の人種隔離を違憲とする連邦最高裁判所の判決につながった。またこのボイコット運動は、それまでほとんど無名だったマーティン・ルーサー・キング・ジュニアという若い牧師を、全国的な著名人に押し上げた。キングのリーダーシップの下で、このボイコットは、地域社会を基盤とする非暴力的な抗議活動の模範となり、後にこれが公民権運動の戦略として成功した。

情熱を内に秘めた活動家としてのローザ・パークスを形成したいくつかの要素を、その生い立ちに見ることができる。ローザ・ルイズ・マコーリーは、1913年2月4日、アラバマ州タスキギーで生まれた。子ども時代のローザの生活は、おじが牧師を務めていた小さな教会を中心としていた。彼女はその教会で深い信仰と人種的な誇りを身に付けた。後に、アフリカン・メソヂスト監督教会が何世代にもわたって黒人の平等を強く推進してきたことを、誇りを持って語っている。

ローザは、祖父母からも強い影響を受け、特に祖父の影響は大きかった。人種差別主義の暴力的な秘密結社クー・クラックス・クラン（KKK）を恐れる家族の不安に応じて、祖父は常に弾を込めた2連式散弾銃を手元に置いていた。クランによる暴力の可能性は極めて現実的なものであったが、パークス一家がそれを体験することはなかった。しかし、ローザの祖父の挑戦

的な姿勢は、彼女の考え方を形成するひとつの要素となった。

11歳になったローザは、モントゴメリーの女学校に送られた。この学校の生徒は全員黒人、教師は全員白人であった。ここで彼女は「わたしたちが人生に望むことは何でも実現できると信じることを学んだ。またこの学校の教師から、白人が皆偏見を持っているわけではないことも学んだ。

ローザはこの学校でジョニー・カーと知り合い、2人の少女は生涯の友人となった。カーは、子ども時代のパークスについて次のように語っている。「わたしはにぎやかによくしゃべる子どもでしたが、彼女はとてもおとなしく、問題に巻き込まれることは決してありませんでした。しかし、何をするにも全力で打ち込む人でした。それでも、とにかくおとなしい人なので、彼女が逮捕されるなどということは誰にも想像できませんでした」

ローザは教師になりたかったが、病気の母親の看病をするために学校を辞めなければならなかった（後に高校の卒業証書を授与された）。18歳のときに理容師のレイモンド・パークスと恋に落ち、2人は後に結婚した。第2次世界大戦中の一時期、ローザはモントゴメリーのマックスウェル基地（現在のマックスウェル空軍基地）で働いていたが、当時この施設はすでに



カリフォルニア州サンフランシスコのローザ・パークス小学校の落成式のプログラムを広げる84歳のローザ・パークス

人種隔離が廃止されていた。後に彼女は、モントゴメリーの交通機関の人種隔離に憤慨したのは、自分が使っていた人種隔離のないマックスウェル基地の交通機関と比べたためである、と述べている。

1956年、バス・ボイコット運動が成功のうちに終了した後も、パークスは公民権のための活動を続け、数回にわたってキングの活動に参加した。翌年には北部のミシガン州デトロイトへ移った。ここで、ジョン・コニヤーズ下院議員の事務所働くことになる。コニヤーズ議員は、自分よりもアシスタントのパークスと会うために事務所を訪れる訪問客の方が多い、とよく冗談を言った。

パークスは、1993年、「全米女性の殿堂」に入った。1996年にはビル・クリントン大統領によって自由勲章を授与され、1999年には議会名誉黄金勲章を受けた。また南部キリスト教指導者会議は、毎年恒例ローザ・パークス自由賞を設立した。

2005年10月24日にパークス

が死去した後、連邦議会は、パークスの遺体を連邦議会議事堂の大広間に安置して彼女の栄誉を称えることを許可する決議を採択した。1852年にこの慣習が始まって以来、その栄誉を与えられたのは、パークスが31人目であり、女性としては初めて、また黒人としては2人目であった。

ローザ・パークスは、公民権運動における自分の役割については常に謙虚であり、バスの座席を譲らなかった決断は神の力によるものだったと語っていた。「変革の時機が熟していたちょうどそのときに、わたしが必要としていた力を神が与えてくださったのは幸運なことでした。わたしは、神がわたしに動かずにいる力を与えてくださったことに、毎日感謝しています」

ケネス・M・ヘア

ヘアは、アラバマ州のザ・モントゴメリー・アドバタイザー紙の社説面責任者。著書に『They Walked to Freedom 1955-1956: The Story of the Montgomery Bus Boycott』がある。

公民権運動の活動家たち

ミシシッピに死す

1964年6月21日、ミシシッピ州フィラデルフィアで、公民権運動の活動家ジェームズ・チャーニー、アンドリュー・グッドマン、マイケル・シュワナーの3人が、地元警察とクー・クラックス・クラン（KKK）の陰謀により殺害された事件は、公民権運動における極めて重要な出来事のひとつであった。行方不明となったこの3人の若者のうち2人が白人であったこと、そしてほとんどひと夏中3人の行方が分からず捜査が暗礁に乗り上げたことから、この事件は全米の注目するところとなり、連邦捜査局（FBI）の捜査官と世界各地の報道陣がこの小さな町に集まった。

従来、ミシシッピ州は保守的な州で、人口の過半数を占める黒人に対して、白人が大きな支配力を振っていた。そうした状況で、同州では長い年月にわたって、部外者や「南部の生活様式」（すなわち人種隔離制度と、黒人のさまざまな基本的権利の否定）を脅かす者に対して、強い不信の目が向けられてきた。1961年にはすでに、公民権運動の活動家たちがミシシッピ州を投票権拡大運動の標的としていた。同州の抑圧的な環境の下で、ごく少数の黒人しか投票を許されていなかったからである。しかし、有権者登録を推進するボランティアが殴打されたり逮捕されたりすることも多く、作業は容易ではなかった。

公民権運動の活動家たちは、米国の他地域に住む人々はこうした状況を理解していないのではないかと懸念し、ミシシッピ州に焦点を絞ったミシシッピ・サマー・プロジェクト（後にフリーダム・サマーと呼ばれる）を企画した。このプロジェクトでは、北部の大学生1000人（主として白人）が、大挙してミシシッピ州を訪れて有権者登録に協力し、こうした行動を取ることでミシシッピ州の状況を広く知らしめることを目指した。このような「侵略」に対して、地元の抵抗が強まった。州の指導者たちは敵意をあらわにして抵抗を誓い、暴力と威嚇によって南部の人種的慣習を維持した歴史を持つ白人自警団KKKが再び活気づいた。

フリーダム・サマーの初日となった6月21日、3人の公民権運動活動家は、KKKによる最近の襲撃事件を調査するために、辺鄙な黒人部落ロングデールへ車で出掛けた。チャーニーは地元ミシシッピ州の21歳の黒人、グッドマンはニューヨーク州の20歳の大学生、そしてシュワナーはニューヨークのローワー・イーストサイドに住む24歳のソーシャルワーカーで、すでに活動家としてはベテランであった。彼らはそれ以前にも、黒人に有権者登録の方法を教える講座を開こうとして、現地を訪れたことがあった。

MISSING **CALL FB**

THE FBI IS SEEKING INFORMATION CONCERNING THE DISAPPEARANCE AT PHILADELPHIA, MISSISSIPPI, OF THESE THREE INDIVIDUALS ON JUNE 21, 1964. EXTENSIVE INVESTIGATION IS BEING CONDUCTED TO LOCATE GOODMAN, CHANEY, AND SCHWERNER, WHO ARE DESCRIBED AS FOLLOWS:

ANDREW GOODMAN	JAMES EARL CHANEY	MICHAEL HENRY SCHWERNER
		
RACE: White SEX: Male DOB: November 23, 1943 POB: New York City AGE: 20 years HEIGHT: 5'10" WEIGHT: 150 pounds HAIR: Dark brown; wavy EYES: Brown TEETH: Good SCARS AND MARKS:	Negro Male May 30, 1943 Meridian, Mississippi 21 years 5'7" 135 to 140 pounds Black Brown Good: none missing 1 inch cut scar 2 inches above left ear.	White Male November 6, 1939 New York City 24 years 5'9" to 5'10" 170 to 180 pounds Brown Light blue Pock mark center of forehead, slight scar on bridge of nose, appendectomy scar, broken leg scar.

SHOULD YOU HAVE OR IN THE FUTURE RECEIVE ANY INFORMATION CONCERNING THE WHEREABOUTS OF THESE INDIVIDUALS, YOU ARE REQUESTED TO NOTIFY ME OR THE NEAREST OFFICE OF THE FBI. TELEPHONE NUMBER IS LISTED BELOW.

↓

DIRECTOR
FEDERAL BUREAU OF INVESTIGATION
UNITED STATES DEPARTMENT OF JUSTICE
WASHINGTON, D. C. 20535
TELEPHONE, NATIONAL 8-7117

June 29, 1964

ミシシッピ州で、FBIによる44日間に及び捜索の末、公民権運動活動家アンドリュー・グッドマン、ジェームズ・アーリー・チャーニー、およびマイケル・ヘンリー・シュワナーの他殺体が発見された。

3人の若者は現地の担当者と会い、KKKが放火した教会の焼け跡を見学した後、ロングデールの西にある郡庁所在地フィラデルフィアへ向かった。その途上、シーセル・レイ・プライス副保安官にスピード違反で逮捕され、ネショバ郡の留置場へ連行された。彼らは当然、地元警察を信用してはいなかったが、抵

抗はしなかった。公民権運動の活動家が皆そうであったように、人種の平等という目標を達成するための非暴力と非抵抗の力を信じていたからである。プライスがKKKの陰謀の片棒をかつぎ、暴徒の群れを集めるまでの時間稼ぎに3人を留置場に入れたことなど知る由もなかった。



グッドマン、チェーニー、シュワナーの3人が殺害されてから41年後の2005年に、エドガー・レイ・キリンが殺人罪で有罪となった。

その晩、プライス副保安官は3人の若者を釈放した。彼らは直ちに車に戻り、活動の本拠としていたメディアンへ向かった。南へ30分ほど走ればメディアンに到着するはずであった。しかし、暗い田舎の道路を走る彼らの車の後を、K K Kの一团が車を連ねて追跡していた。その中にはプライス副保安官もいた。K K Kは、若者たちの車を近くの人目に付かない場所に追い込み、そこで彼らを車から引きずり出して射殺し、近くの酪農場に建設中だった土堰堤に遺体を埋めた。

行方不明となった3人を探すためにリンドン・ジョンソン大統領がF B I捜査官を派遣し、44日間にわたって州内で徹底的な捜索が行われた。ひと夏中3人の行方をめぐる謎が世界中に報道されたが、ミシシッピ州の関係当局は、この事件はねつ造であると主張して捜査を始めることすら拒否した。8月4日、F B I

がようやく3人の遺体を発見すると、このような凶悪な犯罪に責任を負うべき者たちの逮捕・処罰を要求する世論が全国的に高まった。

通常、米国の司法制度では、殺人は犯罪の行われた州の裁判所で州法に基づいて起訴される。ミシシッピ州が殺人罪による起訴を拒否したため、連邦政府は代替策を講じた。1940年代から、連邦政府は、再建時代の古い公民権法によって、南部でリンチを行った暴徒を起訴しようとしてきたが、こうした試みが成功したことはなかった。しかし司法省は、もう一度この方法を試みる決断を下した。1964年12月初め、F B Iは、地元のK K K団員、ネショバ郡保安官および副保安官を含む警察官数人など計21人の男性を逮捕し、3人の活動家の公民権を侵害する共同謀議の疑いで告発した。検察官は、連邦最高裁判所で公民権法を明確にし、この事件に同法を適用

する正当性を立証しなければならなかった。しかし1967年に、ミシシッピ州民から成る連邦陪審団が7人の被告を有罪とする画期的な判決を下し、連邦裁判所が最高10年の懲役刑を科した。

チェーニー、グッドマン、およびシュワナーの殺人事件は、「ミシシッピ砦」の強固な抵抗に打ち勝つための転換点となった。公民権運動活動家の間では、白人が殺されたから全米がようやくミシシッピ州の状況に注目するようになったのだという不満もあったが、全国からの力強い反響が、特に悪質な同州の人種差別の打倒に貢献した。今日ミシシッピ州では、大勢の黒人が投票し、黒人が州議会や連邦議会の議員に選出されている。1964年以降の数十年間に、多くのミシシッピ州民は、公民権運動時代の同州の行為を恥じるようになり、州がこの事件への対処を誤ったことを認めるよう要求する意見も出てきた。2005年6月21日、3人の若者が消息を絶ってからちょうど41年目に、この陰謀を企てたK K K団員で長らく責任を逃れてきたエドガー・レイ・キリンが、ミシシッピ州裁判所で過失致死罪で有罪の判決を受けた。あらゆる人種・民族の米国民が、これを正義の象徴的な勝利と見なし、長年にわたって米国の記憶につきまってきた犯罪が少なくとも部分的に解決されたものとして歓迎した。

フィリップ・ドレー

ドレーの著作には、『Capitol Men - The Epic Story of Reconstruction Through the Lives of the First Black Congressmen』、またセス・ケーギンと共著の『We Are Not Afraid - The Story of Goodman, Schwerner, and Chaney and the Civil Rights Campaign for Mississippi』がある。

メドガー・エバース

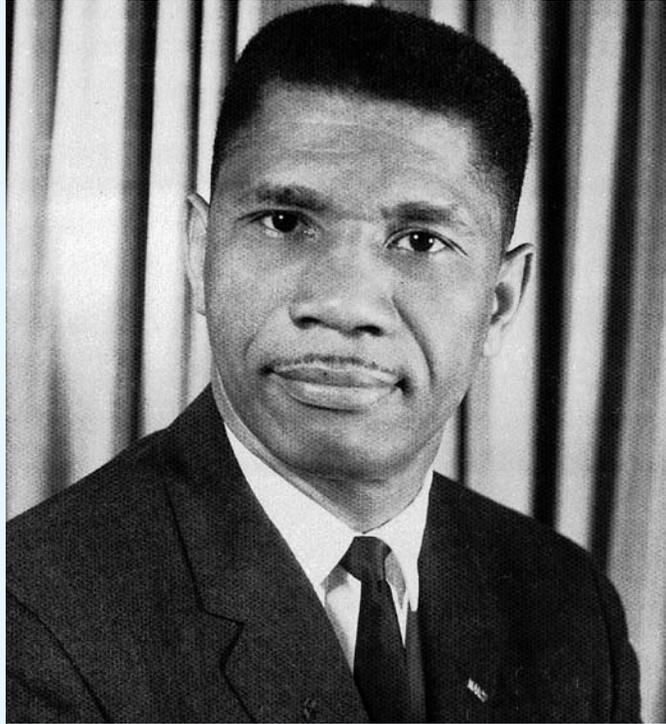
ミシシッピ運動の殉教者

全米有色人種地位向上協会 (NAACP) のミシシッピ州支部代表メドガー・エバースは、精力的な活動家であったが、その生涯は1963年の暗殺によって断ち切られた。37歳のリーダーの死は、公民権運動にとっては不幸な打撃となったが、これによってその後の抗議運動に火がつき、彼の唱えた理念に対して連邦政府の同情的関心を引き付けることになった。

1925年ミシシッピ州の田舎町で生まれたエバースは、第2次世界大戦中、ヨーロッパで米陸軍兵士として従軍した。帰国後、アルコーン大学 (ミシシッピ州ローマン近郊にある歴史的黒人大学) に入学し、学業にもスポーツにも秀でた。この大学で、将来の妻となるマーリーと知り合い、2人は1951年に結婚した。

エバースは、ミシシッピ・デルタ地帯で保険会社と診療所を設立した黒人医師でビジネスマンでもあったT・R・M・ハワードの弟子となった。ハワードは、「トップダウン」方式で活動する公民権組織、ミシシッピ黒人指導者地区協議会 (RCNL) も設立し、アフリカ系米国人の有力な各分野の専門家や牧師たちが、より広く黒人たちの間に自立と事業所有、そして最終的には公民権の要求を広めるよう促した。

エバースは自らが海外で自由のために戦った経験から、その自由を米国内で確立した



1963年当時のメドガー・エバース。同年、暗殺された。

いと決意していた。間もなく、ミシシッピ RCNL で最も影響力のある活動家の一人として頭角を現してく。師匠であるハワードと同様に、エバースも公民権運動をビジネスと結び付け、ハワードのマグノリア生命保険会社の保険外交員として働きながら、NAACP の地方支部を次々と組織し、黒人にトイレを使わせないガソリンスタンドのボイコット運動を先導した。「(トイレを使えないガソリンスタンドは使うな)」という自動車バンパー用のシールがあった)

1954年、エバースは白人ばかりのミシシッピ大学 (「オール・ミス」の呼称で知られる) 法科大学院への入学を出願することで、人種隔離主義体制への挑戦を試み

た。エバースの出願は拒否されたが、ここでの彼の行動力が NAACP の「法廷弁護基金」の賞賛を浴び、ほどなく、NAACP の初代ミシシッピ支部代表に任命された。しかしこれは危険で孤独な仕事であった。

「奇妙に聞こえるかもしれませんが、わたしは南部を愛しています」とエバースは語ったことがある。「南部以外の場所に住もうとは思いません。ここには家畜を飼う土地があり、いずれわたしもそのような生活をするでしょう。ここには釣り糸を垂れスズキと格闘することのできる湖があります。わたしの子どもたちが遊び、成長し、よき市民となる場所があります。ただし、白人がそれを許せば、の

話ですが」

しかし、当時においては、白人の協力を得られる可能性は極めて低いと思われた。この時期、現代米国でも有数の悪名高いリンチ事件が2件ミシシッピ州で発生した。1955年に起きた14歳の少年エメット・ティル殺害事件と、1959年のポプラールにおけるマック・チャールズ・パーカーのリンチ事件である。エバースは、全米でも大きな注目を浴びていたティル殺害事件の捜査に協力した。被告の罪については強力な証拠があったにもかかわらず、全員白人男性で占める陪審団は、わずか67分で無罪判決を下した。陪審員の一人は後に、陪審団は審議を1時間以上に引き延ばして「体裁を保つ」ために、「ソーダ休憩」を取ったと明かしている。(2004年5月、司法省はこの1955年の犯罪訴追手続きを「極めて重大な誤審」として殺人の再審議を行った。しかし、証人となり得る人物の多くはすでに死亡し、証拠も散逸していたため、大陪審は生き残った最後の容疑者の起訴を却下した)

1954年の「ブラウン対教育委員会」訴訟において最高裁判所が下した判決と全国の公立学校における人種隔離政策撤廃の命令に対して、ミシシッピ州は、激しく反発した。市民協議会と呼ばれる州内の白人グループは、いかなる犠牲を払っても人種差別撤廃に抵抗することを断言した。ミシシッピ大学への入学を拒否



夫メドガー・エバーズが殺害された後、ハーワード大学の集会で演説するマーリー・エバーズ。マーリーはその後、公民権活動家として広く知られるようになり、後にNAACPの議長を務めた。

された経験を持つエバーズは、同校に入学しようとする他の黒人を支援した。1962年、空軍の退役軍人ジェームズ・メレディスが、米国連邦最高裁判所ヒューゴ・ブラック判事の直接命令によってミシシッピ大学への入学を許可された。しかし州当局はこの命令に抵抗し、メレディスは、死者2人、負傷者数百人を出した夜間の暴動の後、ようやく授業を受けることができたのである。

メレディスを支援したエバーズに対して、人種隔離主義者は憎悪を募らせていたが、エバーズはミシシッピ最大の都市であるジャクソンで、一連のボイコット、座り込み、抗議活動を始めた。エバーズのこうした活動の強化に対しては、時としてNAACPですら懸念するほどであった。1963年にアラバマ州バーミングハムで、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアが率いた公民権運動が世間の注目を浴びると、エバーズもジャクソンでの活動をさらに拡大して、黒人警官の採用、異人種間委員会の設置、ダウン

タウンのランチカウンターの差別撤廃、ダウンタウンの商店の白人店員による黒人客に対する敬称（ミスター、ミセス、ミス）使用を求めた。

町の反応は険悪だった。近郊のミシシッピ州催事場には、何千人もの抗議者を留置できるような、柵で囲んだ収容施設がいくつも建設された。これは、抗議活動に加わろうとしていた人々に対する単刀直入なメッセージであった。エバーズと彼の支持者はこうした妨害にひるむことなく闘いを続けた。多くの子どもたちを含む地域の黒人たちは、その後も引き続き集会や店のボイコット、行進、ピケラインに参加していった。これらの集団示威活動は、エバーズの長年にわたる公民権運動の頂点であった。そして最大の見せ場は、エバーズが地元テレビ放送で活動の目的を説明したときに訪れた。白人にとって、黒人がテレビに出演し、しかも自分の意見を自分の言葉で語るのを見ることは珍しく、これを見た多くの白人は激しい憤りを覚えた。

ほどなく、エバーズの命が

狙われる出来事が何度か起きた。自宅の車庫に爆弾が投げ込まれたり、自動車にひかれそうになったこともあった。そして、1963年6月12日の夜、エバーズは帰宅して車から降りたところを待ち伏せていた者に撃たれ、自宅の玄関前で息を引き取った。

人気の高かったリーダーの殺害は黒人社会を怒りの渦に巻き込んだ。数日間にわたり、ジャクソンのダウンタウンで、警官との衝突が多発した。市の指導層の白人たちですら、扇動家とはいえ少なくとも馴染みのあったエバーズの死に衝撃を受けた。公民権運動のリーダーたちが米国中から追悼のために駆け付ける中、市の有力者たちは、エバーズの功績をたたえて沈黙の行進を行うことを許す異例の譲歩を示した。エバーズは、軍葬の礼をもってワシントンDCのアーリントン国立墓地に埋葬された。メドガーの兄であるチャールズがジャクソンでの活動でメドガーが果たしていた仕事の一部を引き継ぎ、妻のマーリーは後に著名な活動家となり、1995年から1998年までNAACPの議長を務めた。

公民権運動の時代には挫折感を引き起こす訴訟事件が多かったが、その最たる訴訟のひとつとメドガー・エバーズの名前が結び付くのが、彼の運命であった。彼を殺害した白人優位主義者バイロン・デラ・ベックウィズは、ミシシッピ州の旧家の子孫で、1960年代に2度にわたって裁判にか

けられたが、いずれも白人陪審員によって無罪の判決が下された。ベックウィズが有罪となり終身刑の判決を受けたのは1994年のことであり、エバーズがミシシッピ州の同胞を率いて偏見と不寛容に反対する改革運動を進めてから丸30年がたった。ベックウィズは服役中の2001年に死亡した。

死後のこととはいえ、エバーズは最終的に勝利を取めた。彼が殺害された年には、ミシシッピ州の黒人で有権者登録を完了できたのはわずか2万8000人だった。1971年にはこの人数は25万人を超え、1982年には50万人に達した。2006年には、ミシシッピ州は全米で最も多くの黒人公職者を選出する州となり、同州の連邦下院議員の4分の1、州議会議員の27%を黒が占めるまでになった。

フィリップ・ドレー

ドレーの著作には、『Capitol Men - The Epic Story of Reconstruction Through the Lives of the First Black Congressmen』、またセス・ケーギンと共著の『We Are Not Afraid - The Story of Goodman, Schwerner, and Chaney and the Civil Rights Campaign for Mississippi』がある。